

Title	PsycLIT(心理学行動科学文献情報)のネットワーク利用について
Author(s)	沼澤, 博
Citation	静脩 (1997), 33(2): 2-3
Issue Date	1997-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/37451
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

ろうが、倫理学者でもわかる「原子力発電論」とか、逆に病理学者にもわかる倫理学書とか、専門領域をクロスした知識の需要があることを忘れて貰いたくない。素人向けの通俗の解説書で質の良いものを漏らさず揃えて欲しい。

大学とは本来、専門の領域にまたがる知識を作り出す可能性をもつものでなくてはならない。それなのに実際は、専門の壁、文科系と理科系

の壁がどんどん厚くなってゆく。人間にとってもっとも重要な意思決定は、そのような壁にまたがるものなのである。人間が必要な意思決定の能力を失う危険が増大している。学問のあり方そのものを変えてゆく必要があるが、その土台となるものは、図書館という情報の集積体だろう。

(平成9年1月31日)

PsycLIT (心理学行動科学文献情報) のネットワーク利用について

総合人間学部参考調査掛長 沼澤 博

1. はじめに

このたび、PsycLIT を学内3部局（文学部、総合人間学部、教育学部）で分担購入し、附属図書館のCD-ROM サーバ機により、吉田地区でネットワーク利用できるようになった。検索利用できるようになったのは、1月7日からである。

2. スタンドアローンのころ

PsycLIT は、Psychological Abstracts のCD-ROM 版である。心理学関係の雑誌論文等を検索するデータベースで、1974年以降のデータが検索でき、年4回更新される。各データには抄録がついていて、簡単な内容を知ることができる。このCD-ROM を総合人間学部図書館では、平成7年の夏からスタンドアローン形式で提供してきた。通常の経費とは別に学部創設にかかる予算が配当された折り、「これからは研究者も学生も雑誌論文をもっと利用しなければならない、冊子体目録で検索しているようではいけない」と強く主張してくださる先生があって、講座予算で購入し図書館へ提供されたのである。その時、PsycLIT の他に社会学関係のSociofile、文学・語学関係のMLA International Bibliography も購入していただき、提供してきた。

3つのデータベースのうちで群を抜いて利用の多かったのが、PsycLIT であった。教育学部の院生・学生の利用が多く、聞けば利用した人から人へのヒューマン・ネットワークで広まった様子。最初に使ってその便利さを知った誰か

が、そのよさを宣伝したらしい。いろいろと張り紙をして利用促進を図ったけれど、張り紙よりも実際に経験した人の一言の方が遙かに効果があったということだろう。

「これまでどうやって論文を探していたの？」

「教育学部にある冊子体の『Psychological Abstracts』です」

「CD-ROM と比べて、どう？」

「あんなの、もう、使えませんよ」

そのような会話を幾度となく繰り返した。

しかし、PsycLIT の年間使用料は50万円を超える。特別予算のつかない翌年度以降の契約を講座に期待することはできないし、図書館の予算から拠出するのも無理な話であった。とはいえ、せっかく提供してきたサービスを中止するのは、図書館としても辛いことである。

だから、今年の春ごろからは、

「もうすぐ PsycLIT は使えなくなるからね」

「そんなの、困ります。なんとかしてください」

「そう、困る。だから、その困るっていうのを、ここじゃなくて、教育学部の図書室とか、指導の先生に言ってよ。そうしたら、なんとかなるかもしれない」

というような会話にかわった。

教育学部の図書掛長と顔を合わせると、教育学部の院生・学生の PsycLIT 利用がいかにかいという話をし、なんとか購入に協力してくれるようにという話をしたが、協力したいのだが、図書予算が少ないので無理ですよ、という返事であった。

だから、正直いってなんとかかなと思ってい

たわけではない。いくら便利だからといっても、また PsycLIT の利用が多いといっても、医学・薬学系の MEDLINE のように一日中だれかが使っているというわけではない。せいぜい日に数人が使う程度で、利用者ゼロの日もあるというのが実状だった。

3. ネットワークへ

PsycLIT を総合人間学部・文学部・教育学部で共同購入する話が進んでいて、その具体的な打ち合わせをしたいけれど都合はどうだろうか、という意味の連絡が教育学部の図書掛長から入ったのはいつだっただろうか。

平成 8 年 9 月 4 日付けで教育学部心理学科長の坂野教授名で、「CD-ROM サーバシステムで提供するデータベースソフトウェア (PsycLIT) の運用について (依頼)」が長尾附属図書館長に提出されており、導入のための打ち合わせが 10 月 8 日に行われている。

依頼文書提出の数日後くらいに最初の連絡があり、先生方の都合を確認した上で打ち合わせ日の最終連絡があったのだらうと思う。

附属図書館では、平成 7 年 12 月に「CD-ROM サーバシステムにおける部局等からの提供ソフトウェアにかかる受入要項」を定めており、部局提供の CD-ROM はそれにしたがって購入・管理・運営が行われることになっている。これは、今後ネットワーク利用への要望が増えるであろうことを見越しての策定であったと思われる。

実際、平成 8 年 5 月には、この要綱に基づいて GeoRef のサービスが開始されている。受入要項の基本は、購入費用は申し入れ部局が負担し、運用及び管理にかかる経費は附属図書館が負担するというものである。

受入要項が定められているとはいえ、複数部局で実際に運用しようとすれば、それに付随して幾多の問題が生じる。今回の導入に関しては、利用者数と負担金、冊子体のバックナンバーの保管場所、1 月よりサービスを開始するための契約、検索ソフトの配布方法、サーバシステムの問題等があった。

システム面で、MEDLINE と GeoRef は内容をハードディスクにインストールしてサービス

しているが、PsycLIT はハードディスクへのインストールができないソフトであることが問題であった。提供するためには、サーバ側に CD-ROM ドライブを用意する必要があり、附属図書館でこれを準備することとなった。

その他の問題では、負担金は 3 部局が 3 分の 1 ずつの均等負担とすること、利用が減少すると予想される Psychological Abstracts のバックナンバーは附属図書館に移管すること、契約行為は、受入要項では CD-ROM の提供部局が行うことになっていたが、附属図書館で行うこと、そして検索ソフトの配布や利用手続等事務的な処理については、附属図書館および 3 部局図書室が窓口となることで合意した。

4. 今後の課題

CD-ROM 検索とオンライン検索を比較したとき、前者は時間・費用を気にすることなく利用できる点に長所がある。それをネットワークで利用することのメリットは、学内であれば、いつでも、どこからでも検索できる点であろう。これらの利便性を広く宣伝し、多くの人に利用してもらわなければ、かえって高いものになってしまう。

とはいえ、ネットワークで自由に使うことができるのは、まず教官それから院生であり、学生は附属図書館や所属の図書室のパソコン等を利用して検索することになろう。しかし、総合人間学部図書館には、検索のために利用者が自由に使えるパソコンがない現状である。事務用のパソコンはネットワークにつながっていて検索することができるので、とりあえず希望者にはそれを使って検索してもらえば良いのだが、文書作成やデータ管理等に使用しており、いつでもどうぞ、とはいえない状態である。それに事務室内へ利用者が入ってきて検索するというのは、利用者にとっても職員にとってもあまり好ましいことではない。おそらくこれは総合人間学部図書館だけの問題ではなく、各部局図書室が抱える共通の問題であろう。今後、ますますネットワーク利用が盛んになるとされるだけに、全学的な課題として早急な解決が望まれる。